

# パラリンピック座談会



飛松好子氏

とびまつ・よしこ 1985年、車椅子バスケットボールの日本代表として、88年ソウルパラリンピック、89年神戸フェスティバル日本選手団帯同医師。92年バルセロナパラリンピック脳性麻痺国際クラス分け委員。現日本障がい者スポーツ協会医学委員会副委員長、日本ボッチャ協会相談役



三井嬉子氏

みつい・よしこ 大阪府出身。神戸市立外国語大学在学中に松阪三井家へ嫁ぐ。1994年からスペシャルオリンピックス活動に携わり、スペシャルオリンピックス日本理事、国際本部理事など歴任。知的障害者支援への貢献が認められ、2017年日本障がい者スポーツ協会から特別功労賞を授与。山形交響楽協会会長



山根昭治氏

やまね・しよじ 1995年、北海道釧路市出身。乳幼児期に高熱によりろう者となる。専修大学道短大を経て、北海道高等聾学校寄宿舎指導員。2016年定年後、北海道旭川聾学校勤務。一般社団法人旭川ろうあ協会理事長、公益社団法人北海道ろうあ連盟理事長、特定非営利活動法人ろう教育を考える全国協議会副理事長

## 国立障害者リハビリテーションセンター総長

小倉 いろいろな障害者の方と一緒に過ごすか、仲間意識を持つ、そういうところから家に引きこもりがちになる障害者の方たちが外に出るチャンスをつくる。それが始まりです。世界大会でも選手のレベルに応じてエントリーができます。予選とはレベル別にクラス分けすることであり、例えば同じ50メートルでも速い人から順番に8人ずつ、最大8人でクラスを分けていきます。金メダリストもたくさん出ます。同じくこのレベルの人と競い合うことで子供たちの表情が豊かになります。それまで「最初から競う気がある」とか「勝つて喜んだらいいじゃないか」とか言っていた親御さん、もういらないです。やってみると彼らは本当に負けず嫌いがたり、勝つて喜んだりしているんです。そういう当たり前のことが当たり前に表現できる場面を見てきました。できるだけ裾野を広くすることが大切です。

山根 デフリンピックの知名度が低いのは、スポンサーの問題もあると思いますが、メディアが取り上げてくれない。10年前、安倍晋三首相に「デフリンピックの応援をしてほしい」とメールをしました。3日後に訪問し、首相として初めてデフリンピックを応援していただいた経緯があります。国会の予算委員会でも取り上げられ、質問に立った国会議員が手紙を挨拶してくれましたが、新聞に掲載

飛松 デフリンピックの知名度が低いのは、スポンサーの問題もあると思いますが、メディアが取り上げてくれない。10年前、安倍晋三首相に「デフリンピックの応援をしてほしい」とメールをしました。3日後に訪問し、首相として初めてデフリンピックを応援していただいた経緯があります。国会の予算委員会でも取り上げられ、質問に立った国会議員が手紙を挨拶してくれましたが、新聞に掲載

三井 特別支援学校でどういった動きが出てきているか、という点も期待しています。ただ、特別支援学校とデフリンピック支援ワーカーが連携するだけでは、少し残念なところがあります。一般の小学校と中学校の生徒たちが、障害のある人々と触れ合うことで彼らを理解する。なかなか触れ合う機会がないが、見る人の問題もあると思います。とくに子供たちや青少年の意識を向けさせるには、学校に通う生徒が、数が多いのは2万3千人くらいいたのですが、だんだん減ってきています。インクルーシブという考え方があり、保護者が学校を選択する時代が変わ

小倉 いろいろな障害者の方と一緒に過ごすか、仲間意識を持つ、そういうところから家に引きこもりがちになる障害者の方たちが外に出るチャンスをつくる。それが始まりです。世界大会でも選手のレベルに応じてエントリーができます。予選とはレベル別にクラス分けすることであり、例えば同じ50メートルでも速い人から順番に8人ずつ、最大8人でクラスを分けていきます。金メダリストもたくさん出ます。同じくこのレベルの人と競い合うことで子供たちの表情が豊かになります。それまで「最初から競う気がある」とか「勝つて喜んだらいいじゃないか」とか言っていた親御さん、もういらないです。やってみると彼らは本当に負けず嫌いがたり、勝つて喜んだりしているんです。そういう当たり前のことが当たり前に表現できる場面を見てきました。できるだけ裾野を広くすることが大切です。

# 多様な大会認知拡大へ

パラリンピック以外にも障害者スポーツの国際大会が行われている。今回の日本財団パラリンピックサポートセンター座談会では、各組織の関係者が現状を語った。コーディネーターを務めたパラサポートセンターの小倉和夫理事長によれば、「パラリンピック」は国民の9割から9割5分の人が知っているが、知的障害者の「スペシャルオリンピックス」は1割から2割弱、7月18日からトルコ・サムスンで第23回大会を開く聴覚障害者の「デフリンピック」は1割程度の認知度（パラリンピック研究会統計）だという。認知度を高め、参加者を増やすにはどうしたらいいか。（構成・佐野真輔、写真・福島寛和）



小倉和夫氏

## 飛松氏 障害有無関係なく運動の楽しさ伝える



(左から) 山根昭治氏、三井嬉子氏、飛松好子氏、小倉和夫氏—東京都港区

飛松 学校教育に入れていくことだと思います。肢体不自由の子供も体育の時間が訓練ではなく、ゲームをやっているという、それが基本だと思っております。

三井 特別支援学校でどういった動きが出てきているか、という点も期待しています。ただ、特別支援学校とデフリンピック支援ワーカーが連携するだけでは、少し残念なところがあります。一般の小学校と中学校の生徒たちが、障害のある人々と触れ合うことで彼らを理解する。なかなか触れ合う機会がないが、見る人の問題もあると思います。とくに子供たちや青少年の意識を向けさせるには、学校に通う生徒が、数が多いのは2万3千人くらいいたのですが、だんだん減ってきています。インクルーシブという考え方があり、保護者が学校を選択する時代が変わ

## 三井氏 触れ合う機会提供が大事

飛松 デフリンピックに出るためには、障害を受けてから最初の5年くらいはまず体を鍛えないと耐えられませぬ。それからようやく選手として芽が出てきます。ちょっとやそつとではまねできないところがあり、彼らの努力は生き方としてのかがみだと思えます。でも、じゃあ自分もやろうとは結びつかない。機会と環境の問題があるからです。肢体不自由の人もそうだし、知的障害の方も、聴覚障害、視覚障害の方も、外に出ていくためのアクセシビリティの問題があって運動する

山根 デフリンピックの知名度が低いのは、スポンサーの問題もあると思いますが、メディアが取り上げてくれない。10年前、安倍晋三首相に「デフリンピックの応援をしてほしい」とメールをしました。3日後に訪問し、首相として初めてデフリンピックを応援していただいた経緯があります。国会の予算委員会でも取り上げられ、質問に立った国会議員が手紙を挨拶してくれましたが、新聞に掲載

## 山根氏 国も情報発信してほしい

小倉 スペシャルオリンピックスでは、地方組織で地域との密着をはかっています。三井 この20年で47の都道府県に地区組織ができて、それぞれの地元でトレーニングプログラムをしています。それだけのニーズがあるということ、まだまだ増やしたいと思っています。過疎化というものが、地方には小学校と中学校があります。その小学校や中学校を使い、小学校の単位で、地元でいる方がボランティアで障害のある方たちがスポーツをする。速くはセンターまで行かなくても毎週校庭や体育館を使って、自分の住んでいるところで活動できます。特別支援学校がある地域なら、学校の体育の時間をスペシャルオリンピックスのプログラムにしてしまえばいい。潜在的な選手がそこにはいます。増やしていけるはずだと思います。

山根 全国を問わずあちこちで選手層は、高齢化しています。例えば団体競技、野球とかバレーボールも地域でできなくなっています。そこで高齢者に合ったスポーツ。例えばグラウンドゴルフなどを取り入れるケースも増えてきました。また、後継者を育てるためにどうしたらいいのか考えなくてはなりません。アスリートが現役引退した後、子供たちを集めて指導するなどの、組織の体系化が弱い。それが課題だと思っています。

小倉 スペシャルオリンピックスでは、地方組織で地域との密着をはかっています。三井 この20年で47の都道府県に地区組織ができて、それぞれの地元でトレーニングプログラムをしています。それだけのニーズがあるということ、まだまだ増やしたいと思っています。過疎化というものが、地方には小学校と中学校があります。その小学校や中学校を使い、小学校の単位で、地元でいる方がボランティアで障害のある方たちがスポーツをする。速くはセンターまで行かなくても毎週校庭や体育館を使って、自分の住んでいるところで活動できます。特別支援学校がある地域なら、学校の体育の時間をスペシャルオリンピックスのプログラムにしてしまえばいい。潜在的な選手がそこにはいます。増やしていけるはずだと思います。

チャンスのない。それをいかに保障するか、その人たちなりにできる運動を提供していくか。どこでも身近に障害者が運動できる場の提供も含めて、考えていく必要があります。山根 全国を問わずあちこちで選手層は、高齢化しています。例えば団体競技、野球とかバレーボールも地域でできなくなっています。そこで高齢者に合ったスポーツ。例えばグラウンドゴルフなどを取り入れるケースも増えてきました。また、後継者を育てるためにどうしたらいいのか考えなくてはなりません。アスリートが現役引退した後、子供たちを集めて指導するなどの、組織の体系化が弱い。それが課題だと思っています。

# 衣類を寄付して「ふくのわ」の輪を広げよう

ご家庭にまだ十分に着られる衣類は眠っていませんか？  
ふくのわプロジェクトとは、皆様に寄付していただいた衣類を、リユース専門業者に買い取ってもらい、その収益金でパラスポーツ(障がい者スポーツ)を応援しよう! という活動です。

### 東京サンケイビルで衣類回収イベントが始まります

恒例となった大手町での衣類の回収が、7月26日(水)からスタート。会場となる東京サンケイビルの開館時間帯ならいつでも衣類回収ボックスにご投函いただけます。期間中、月・水・金の11時半~13時は富士紡HDの協力でチャリティーバーゲンも開催します！

期間 7月26日(水)から8月4日(金)  
時間 7:00~23:30(※最終日は17時終了)  
場所 東京都千代田区大手町1-7-2 東京サンケイビル 地下2階プロモコーナーII(サンドイッチ屋さんの隣)  
回収対象 洗濯済みのまだ着られる衣類(穴あきやシミありは不可)、ネクタイ、マフラー、スカーフ、ハンカチ、下着、手袋、帽子、和服、帯、バッグ、シューズ、タオルなど ※キャスター付バッグは不可

### 1年中受け付けています!

衣類を提携先倉庫に送ってください  
海外の中古マーケットで販売することを目的に、集まった衣服はすべてマレーシアへ送られます。送料は送り主の負担となりますが、男・女、年代、ブランドなど問いません。買い取り金額は自動的にふくのわプロジェクトへ寄付されます。

回収対象 まだ着られる衣類(スーツ、ドレス、Tシャツ、子供服も可)、ネクタイ、マフラー、スカーフ、手袋、帽子、和服、帯、下着、水着、毛布、シューズ、タオル、ハンカチ、カーテン

送り先 〒300-0726 茨城県稲敷市西代703 ふくのわプロジェクト 関東流通センター TEL:070-4176-3700 担当 郡司

衣類回収の流れ  
寄付していただく衣類  
郵送  
リユース専門業者倉庫  
買い取り、船で輸送  
古着工場(マレーシア)  
各地の気候や文化にあわせて出荷  
世界各地中古衣料マーケット(マレーシア、パキスタン、バングラデシュなど)

主催 産経新聞社

オフィシャルパートナー



富士紡ホールディングスはふくのわプロジェクトを通じてパラスポーツの発展を応援しています!

宅配買取サービス「ブランディア」を通じてふくのわに参加できます。詳しくはふくのわHPへ

問い合わせ先 ふくのわプロジェクト事務局 fukunowa-pj@sankei.co.jp

ふくのわプロジェクト 検索

